二代目勇者は異世界育ち！

内海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二代目勇者は異世界育ち！

【Ｎコード】
Ｎ９１６０Ｓ

【作者名】
内海

【あらすじ】
僕の家の『奥の部屋』には、異世界に通じる扉がある。
幼い頃はそれが普通で、誰の家にでもあるものだと思っていたけれど、どうやら我が家は普通の家庭とは違うらしい。
でも、強くて頼りになる父さんと、綺麗で優しい母さんに囲まれて育った僕は、割と普通の高校生だと思う。
同い年の従姉弟、優真（ゆま）と瞬（シュン）の二人と僕は、そんな異世界とこちら

の世界を行き来して育った幼なじみ。
僕たちにはどうやら秘密があるらしく、父さん達は小さいときから僕たちによく言っていた。
「お前達にはいつか話さなきゃならないことがある。でも、もっと大人になってからだ。だからそれまでは決して――」
しかしある日、平和だった日常は突然崩れてしまう！

序話

ウチの家庭はよそとなんか違う。

最初にそう気がついたのは幼稚園に入ってすぐの事で、それでもあまり僕は気にしなかった。

迎えに来てくれる他の子たちのお母さんは黒い目に黒か茶色の髪なのに、僕の母さんは宝石みたいな緑の目に銀と金を混ぜたようなキラキラ輝く髪の色をしていたからで、そんな綺麗な母さんが僕の自慢だったからだ。

「アシュー、おいで」

明日斗（あすと）という僕の名前を、母さんはいつもアシューと呼ぶ。僕を呼ぶときの母さんはいつも笑顔で両腕をいっぱいに広げていて、その声が聞こえると幼かった僕は誰と何をしていても駆け寄ってその腕の中へ飛び込んだものだった。

幸せで、満たされていて、何の疑問も抱かなかった。

はじめて疑問を抱いたのは、小学校に上がってからのこと。

家族の事を作文に書きなさいと言われて、僕は小さな時から見てきたことをそのまま書いて発表したら先生にひどく叱られたのだ。

「明日斗くんはマンガの読み過ぎです。先生は家族のことを書きましょうと言ったのに、どうしてこんな作り話を書いたんですか？まったく、何のゲームのまねなんだか」

作り話と言われて驚いたのは僕の方だった。僕はただ、こないだの連休に家族で行った旅行での出来事を一生懸命、正確に書いただけだったのに。

「明日斗くんのお父さんがとっても強くて、そんなお父さんが大好きなのは先生もよくわかるのよ。でも、お父さんがオオカミの集団と剣を握って闘うっていうのは、どうなのかしら。そして、いとこのゆまちゃんが怪我をしたのを、明日斗くんのお母さんが魔法で治したっていうのはねぇ」

クラスメイトは笑った。先生はまじめにしなさいと叱った。僕はうつむいて黙った。

ほんとうの、ほんとうに、本当のことを書いたのに。

帰ってから母さんと父さんにそのことを話すと、二人はほんのすこしだけ困った顔をして、それから父さんの膝の上に抱き上げられた僕は真面目な顔で言われたのだった。

「明日斗、お前は悪くない。お前は本当のことを書いたのだからね。だから友だちに笑われたことも、先生に叱られたことも、気にするな。ただこれからは、奥の部屋の向こうの世界のことは、他の人には話さないようにした方が良いぞ」

どうして？　と僕は聞いた。小さな頃から行き来しているあの世界が、僕はとても気に入っていたからだ。

すると父さんはニヤリと笑って「お前に重大な秘密を教えよう」と言った。

「実はな、奥の部屋の向こうの世界は誰の家にでもあるんじゃないんだ。クラスの友だちだけじゃないぞ、学校の先生も、小学校の上

級生たち全員も、近所のひとの誰の家にも、普通は無いんだ。みんな『こっちの世界』だけで暮らしていて、『あっちの世界』の事は、行くどころかあることを知りもしないんだ」

それはまるで、小さな頃から遊んできた近所の公園の存在を、他の人は誰も知らないんだと言われたようなものだった。

僕の家は普通の一軒家だけど、ご飯を食べる部屋の隣がテレビを見る部屋で、その隣が押し入れのある和室になっている。

押し入れは、ふすまを普通に引いてあけると普通の押し入れで、布団とか季節に合わない服とかが入っているのだけど、ふすまの取っ手に指をかけてドアのように開いてあけると石造りの暗い部屋が現れるのだ。

そこは僕のおじいちゃん、つまり母さんのお父さんの家の奥の部屋で、こちらのドアを閉めないと向こうのドアは開かないようになっている。

そんな部屋が誰の家にでもあるものだと思っていた僕は、父さんの言葉にびっくりした。

でもどこかで、ああやっぱり、と納得もしていたんだ。

ウチはどうやら本当に、よその家とは違うみたいだ――と。

「あったりまえじゃないのそんなの。幼稚園入る前に気がつくでしょ、普通」

それから十年後、高校生になった僕は同い年の従姉妹、優真(ゆま)に思

い出話を話したところ、けちょんけちょんにコキ下ろされていた。
電話なので顔が見えないけれど、きっと優真はアホを見るような目で電話先の僕を見つめ、前髪を指先でくるくるといじっているに違いない。間違いない。だってそれは彼女の、イライラしたときの癖なのだ。

「いや、そりゃあ優真はそうかもしんないけどさ」

生まれて三ヶ月でしゃべり出したという天才児の優真と一緒にされても困る。そう思って弁解し始めた僕の機先を制するように優真は、ふん、と言って付け加えた。

「シュンだって気がついてたわよ、幼稚園で」
「ううう」

瞬（シュン）というのは優真の双子の弟で、かけっこがべらぼうに速い。でも、おつむの方は僕と同程度か、もしくはちょっと下くらいだったはずで、だからこそ優真のこの台詞は実に手痛いダメージを僕に与えてくれた。僕はもしかしてあいつよりもアホなんだろうか。クレヨンのレモン色はレモン味と信じて完食してしまうような、あのアホよりも。

「で？　どうして今更そんな昔の話をしてきたわけ？」

痛恨の一撃というより毒汚染効果のあるようなダメージに苦しんでいる僕のことなどまったく気にせずに、優真は僕に尋ねてきた。僕はそれでようやく本来の用件を思い出した。
僕が話しているのは携帯電話ではなく、冷える廊下の真ん中にある固定電話の親機からなのだ。親機というと子機がありそうに聞こえるかも知れないが、うちにはそんな洒落た者はない。母さんが電

波が苦手で、我が家では無線の類は御法度なのだ。
だから、向こうで優真がどんな状態で僕と話しているかは知らないけれど、僕はさっきから寒くてたまらない。かじかむ足の指先をモジモジとさせながら、ちゃんちゃんこを着た背中を丸めて声をひそめて僕は優真に相談する。

「そうだった、なあ優真、おまえもう聞いたか」
「主語を省いて話すのはやめて。なんの話よ」
「だからさ、アレだよ。昔っから父さんたちに言われてる『お前達が大人になったら話す』っていう話」
「それが何よ」
「こないだ偶然父さんたちが話し合ってるのが耳に入ってしまったんだけどさ――」

ぼくはそこできょろきょろと周囲を見やった。
誰もいない。そのはずだ。
今、父さんと母さんは二人で「向こうの世界」へ行っているのだから。

「どうもそろそろ話そうって事になったらしくてさ、それで父さんたち今あっちに行ってるんだけど」
「うちもそうよ。それで？」
「どうやらその「話」ってのが、実は――」

声をひそめたその時だった。

バンッッッ！

と、爆発するような勢いで背後のドアが開いて、僕は飛び上がった。
父さんたちが帰ってきたのか、と心臓が口から飛び出るほどに驚きつつ振り向くとそこには。
「――貴方が、アシューね？」
薄暗い廊下の蛍光灯の下、見たこともない美少女が扉に寄りかかるようにして立って僕を見つめていた。
見たこともない？
いや。
この緑の瞳、そして砂漠の月のように不思議に輝く髪の色は――
「母さん？　いや、違う。でも……」
「ちょっと、どうしたのよアシュー！　こらっ、返事しなさいってば！」
手の中の受話器が優真の声でなにか叫んでいるけど、僕の耳には入らなかった。
僕の耳に入っていたのは母さんと同じ色の眼と髪を持つ少女の荒い呼吸であり、目に入っていたのは紅く染まったその両手であり。
「――はやくっ！　早く来て！　リキとレーナが死んじゃうっっ！」
身を震わせるように僕の父さんと母さんの名を叫ぶ少女の背後から漂ってくる血の臭いを、僕はこの鼻でかいでいるのであった。

これは、クラスメイトは誰も信じてくれない、本当の話。

そして僕と僕の家族が巻き込まれた、異世界の争乱の物語――。

二話

僕はすぐに受話器を置いて少女のもとに駆け寄った。優真がなにか叫んでいたけど気にしない。今はそれどころじゃないと思ったからだ。

薄暗い照明のせいで気がつかなかったけど、近づいてみるとその女の子は体のあちこちに擦り傷を作っていて、服のあちこちが焦げていた。かと思えば髪の毛はシャワーでも浴びたみたいに濡れていて、ぽたぽたと雫を床の上に落としている。

なによりその足には靴を履いたままで、その靴の表面には血の雫が数滴、いまだ乾かずに飛び散るように付いていた。

間違いない、この子は「向こうの世界」の子だ。

これまで一度も会ったことがないけど、母さんにこんなに似ているんだ。母さんの親戚の子なのかも、と考えていたら突然手をつかまれて引っ張られた。

「何をボーッとしてるの！　早く！　早く！」

「うわあっ、何だよ、ちょっと待ってよ！」

「いいから早く！　リキがっ、レーナが……っ！」

また出た僕の父さんと母さんの名前。

そこで突然に僕は気がついた。

体中の擦り傷。

焦げているのにずぶ濡れ。

これってもしかして、いや、もしかしなくても……

「魔法で戦ったの？」
「そんなこと見れば分かるでしょう！　今はそんなことより――！」
焦ったように僕の手を引く女の子が、急に足を止めた。それで考えをまとめようとしていた僕は彼女の背中にぶつかり文句を言いかけて、それからようやく気がついた。
目の前の、奥の部屋に通じる引き戸に寄りかかって立つ、血まみれの男の姿に。
「――明日斗……ディーナ……」
それは、父さんだった。
荒い呼吸のなか絞り出すように僕の名前と聞き覚えのない名前――きっと僕の手を捕まえるこの子の名前を呼びながら、父さんは血まみれ汗まみれの顔で、ニヤリ、と笑った。
「……予定が……狂ったが……まあいいか……くっ！」
「リキ！」
「父さん！」
ふすまに寄りかかって立つ力もなくなったのか、崩れるように倒れる父さんの姿に僕はかつて無いほど驚いて、女の子と一緒に駆け寄った。
そして気がつく。
「向こうの世界」へ通じる戸のあるこの奥の部屋、８畳ほどのこの和室に倒れているのは父さんだけじゃない。
火に焼かれ、水に濡れ、血に汚れてはいるけれど、見間違えるはずもない。
あのキラキラと輝く最高に綺麗な色の髪。

「母さんっ！」

母さんはうつぶせに倒れていて、僕の声を聞くとひどくけだるそうに顔を上げ、僕の顔を見た。

「ア……アシュ……」

僕の名を呼んで、母さんは微笑んだのだろうか。

ふっ、と、その目が落ちるように閉じ、母さんは指先まで力が抜けたようになって動かなくなった。

全身の毛が逆立つような恐怖を、僕は感じた。

母さん、母さん！

母さんが死んじゃう！

「かあさん！」

「――落ち着け、明日斗！」

足下からの声に、僕はびくっと、まるで棒で打たれたように立ちすくんだ。

声の主は父さんで、ディーナと呼ばれた女の子に助けられて壁に背を預けて座り込んでいる。荒い呼吸は変わらないけれど、その目はこれまで見たことがないくらい鋭い光を浮かべていて、それでようやく僕は悟った。

ああ、これは本当にヤバいんだな、と。

狂狼の集団に囲まれたときも、肉食竜に襲われたときも、父さんは余裕のある表情を崩さなかったのに――今は。

おかしなことに、僕はそれで逆に冷静になれた。

すっと頭の芯が冷えるような感覚に僕は目を閉じ、息を深く吸い込んで、ゆっくりとはき出した。
そんな僕を見て、足下で父さんが「それでいい、明日斗」と言っているのが聞こえて、僕はさらに自信が持てた。
「救急車は、呼ばない方がいいんだね？」
目を開けた僕が最初に父さんに確認したのはそのことだった。
父さんは黙って、こくりと肯いた。それで僕は確信する。これは魔物に襲われたとか不注意で怪我をした、というレベルじゃない。悪意を持った人間の集団に襲われたのだと。
子供の頃から父さん母さんに言われてきた。あちらの世界で受けた魔法や剣の傷は、こちらの世界の病院のお医者さんには見せられないのだ、と。治せる治せないの話ではなく、そういう傷を見つけたら警察に通報されてしまうから、と。そして今ならわかるが、我が家は警察に見られては困るものが結構たくさんあるのだ。主に刀剣の類が。
父さんの右手は、血がだらだら出ている左肩の深い傷を押さえている。ディーナは、僕と父さんが話し始めたのを見てその場から去り、今は母さんの側にいる。
うつぶせになっているのを仰向けにして、頭の下に部屋の隅にあった座布団をしいてやっている。
仰向けになった母さんの姿を見て、僕はまた叫びそうになった。
母さんの胸から腹にかけて、まるで巨大なたいまつを押しつけられたみたいに酷く焼きただれていたからだ。
「レーナ！　お願いレーナ！　目を開けて！」
「くっ――」

力なく倒れる母さんに取りすがるディーナの姿は、こんな時にと自分でも思うけれど、まるで親子のように見えた。
きっと、髪と目がよく似ているせいだろう。
いったい何者なんだろうか、この子は。そして父さんと母さんの身に何が――

僕はぐちゃぐちゃになりそうな思考を無理矢理ストップして、リセットすることにした。
優先順位をつけて考えろ、何が一番大切か、どうすれば最短時間で最大の結果を生み出せるか――父さんに子供の頃から言われてきたことを思い出し、考える。

事情は分からない、だからこの際、この子が誰かだとかどんな理由で二人がこんな傷を負ったのか、なんてことは後回しだ。
今はともかく、父さんと母さんの命を助けるときだ。

母さんの方が傷が派手で意識もないが、あれはきっと魔法の火による傷だ。
それならまだ、大丈夫。俺はそう判断する。
前に聞いたことがある。母さんは普通の人よりも魔法の攻撃に対する抵抗力がうんと高いから、多少の攻撃では致命傷にならないと。その母さんにここまでひどいダメージを与えるなんて、どれだけ強力な術だったのだろうとは思うけど、それも今は余計なことだ。

それよりも、今は父さんが危険だ。
人並み外れた体力と精神力で意識を保っているけれど、血を流しすぎている。流れているのは真っ赤な鮮血で、これはつまり動脈から出血していることを意味している。

母さんが起きていたら――僕は今は選べないその選択肢の誘惑に

ぎりっと歯がみする。

意識を失っているのが父さんで、起きているのが母さんだったら、この状況はあっという間に改善する。

なぜなら母さんは癒しの魔法が大得意で、死にかけの傷でもあっというまに治してしまえるから。

あちらの世界とこちらの世界では環境が違うから、いくら母さんでもこちらでそこまで強力な術を使うことは出来ないけれど、出血を止めて失われた血を戻すくらいは出来たはずだ。

しかし――今は母さんは気絶している。

そして父さんも、僕も、癒しの術は使えない。

「ディーナ」

僕は母さんの側で静かになってしまった女の子に声をかけた。

母さんそっくりの少女は涙でぐしゃぐしゃになった顔を上げてこちらを見た。

「なに」

「君は、癒しの術は使える？」

「使えないわっ！　使えたらとっくに――！」

「わかったわかった、ごめんよ」

綺麗な緑色の瞳から、また涙を溢れさせながらわめき出す女の子に僕は詫びた。予想通りの返答だったけど、冷静さを失っているようだったので一応念のために聞いただけなのだ。

しかし、それではどうするか。僕はさすがに焦った。

こうなったら、警察に通報されようがなんだろうが、かまわない。二人の命が優先だ。救急車を呼ぼうかと思った僕に、父さんから声がかかった。

「ゆ……ユマちゃんを……」
「えっ？　優真？」
「そうだ、キシロんとこのユマちゃんを呼ぶんだ……うっ……」

どういうことだ？
どうしてこの場に、さっきまで電話で話していたおれの従姉妹で幼なじみの優真を。
いくら国の機関が調査に来るような天才少女でも、医者ではないのだから――そう考えて、はっと気がついた。

もしかして、もしかすると――まさか！

「優真は――魔法を使えるの？」
「ああ……あの子は天才……だ」

俺はそこから先を考えることをやめた。
身を翻して部屋を飛び出し、テレビのある部屋を抜け、食事をする部屋を抜け、ドアを蹴破るように電話のある廊下に飛び出した。
そこで気がつく。

電話が鳴っている。

いつから鳴っていたのだろう――それもどうでもいい。
でもこの電話の主はきっと優真だ！　僕はなぜか絶対の確信を持って受話器を取り上げた。

「優真っ！」
「うわあっ、びっくりした！　アシューあんたね、どういうつもりよ。私じゃなかったらどうするつもり！？」

「優真っ、頼む。すぐに来てくれ」
「はあ？　あんた私の話聞いてる？　どういうつもりよさっきは、話の途中で電話切ったりして」
「ごめん、質問には全部あとで答えるから、今はとにかく僕の家にすぐに来て！　タクシーで飛ばせば２０分もかからないだろ？　お金は僕が出すから、早く！」

最後の方は叫ぶようになっていたかもしれない。僕の勢いに押されるように黙った優真は、短い沈黙の後にしっかりとした声で言った。

「――分かった。すぐ行く」
「ありがとう、優真」
「ねえアシュー、ひとつ、これだけは確認させて」
「なんだい」
「『奥の部屋の世界』を通って行けばすぐに着くのに、それでもタクシーで来い、と言うのね？」

優真は賢い。
僕が説明を飛ばした部分を、的確に察知して質問してきた。

「ああ、そうだ」
「――了解。１０分で行くわ」

素っ気ない感じで電話は切れた。
だけど僕は安心感と疲労感で、冷たい板張りの廊下の床に、ぺたんと腰を下ろしてしまった。
ツーツーと鳴る受話器を電話機の上に置こうとして、受話器が僕の手の形をした血の跡で汚れているのを見た。

これは夢じゃない。
ほんとうの、ほんとうに、本当のことなのだ。

――先生に怒られてもいい。

夢だったら、いいのに。

三話

「待たせたわね、アシュー」

優真は宣言通り、１０分で現れた。

しかし交通手段はタクシーではなかった。

「……お疲れ、シュン」

自転車のハンドルにぐったりと体を預けてヒーハー言ってるシュンに労いの声をかけたのは、ママチャリの後部座席に座ってきた優真ではなく、僕だった。

ママチャリ二人乗りという種目がオリンピックにあったなら金メダル間違いなしのタイムでここまで走ってきたはずのシュンは、そんな男同士の連帯に荒い呼吸のなか、親指を立てて「やってやったぜ」と言った。

「何バカやってんの！？　急ぐんでしょ、早くしなさいアシュー！」

優真はいいながら勝手にずんずん奥へ入っていく。子供の頃からお互いにしょっちゅう出入りしている親族の家だ。躊躇も遠慮も迷いもない。

僕も優真を呼び止めることはせず、シュンにドアを閉めて入ってきてくれるようにと言い残してその後を追った。

「おじさま――っ！」
「よう、ユマちゃん……すまないな……」

部屋に入った優真は、血まみれの父さんと焼き焦げた母さんを見て、拳を握りしめたまま絶句してしまった。
そんなユマに、父さんは虫の息になりながらも、ニヤリと笑った。
父さんは強い。こんなときに笑えるなんて。
ピンチの時こそ笑えといつも父さんが言ってるけれど、言うだけじゃなく本当にやっているのだと、僕はこんなときなのに感動した。

「おじさん」
「おお、シュン君も……来たのか。そうか……やけに早いと思ったら、シュン君が連れてきてくれたのか」
「おじさま、今はそんな事よりっ！」

部屋の中に広がる惨状に、いつもはへらへら笑ってるシュンも顔を引きつらせている。
優真は壁に背を預けて半身を起こしている父さんの側にひざまずいて手をかざした。

「じっとしててください！　すぐにヒールをかけますからっ！」

すると父さんは首を振って手をのばし、かざされた優真の手をそっと下ろさせた。

「俺より先に、レーナを頼む」
「何格好つけてるんですかおじさまっ！　どう見たっておじさまの方が危険です！　今すぐヒールしないと、命がっ」

親父の、血に濡れた手に触れられたことさえ一切気にした様子も

なく、優真は父さんに癒しの術をかけさせてくれるように訴える。
しかし――さすがの天才優真も、こういう緊急事態では判断を誤るのだろうか。
俺は、優真の肩に手を置いて、振り向いた優真に諭すように言った。

「父さんの言うとおりにして」
「だって、そんなっ！」
「優真、父さんはたしかに格好つけだけど――今のは格好つけてるわけじゃないよ」

そう。自分よりも母さんを助けてやって欲しい、というのは、なにも我が身を犠牲に妻を救うお涙頂戴の感動ストーリーを望んだわけじゃない。
堅実な現状認識と、冷静で理性的な判断力が導き出した、この場における最適解なのだ。
『自分も含めて全員を救う』という、その目的へ達する、最短経路なのだ。

優真が魔法を使えるということを、僕は今夜に至るまで知らなかったけれど、父さんが天才とまで褒めるのだからかなりの力があるのだろう。
しかし、それでも母さんを超えることはあるまい。将来はわからないけれど、現時点では母さんの力にはまだ及ばないはずだ。
なぜなら母さんもまた、かつて天才とうたわれた魔法使いだったのだから。

その母さんにして、こちらの世界ではほとんど魔法の力を使うことができなかった。
なぜならこの世界には、マナと呼ばれる魔法の力の源となるエネ

ルギーが希薄で、自分の中に蓄えている力しか基本的に使うことが出来ないからだ。
魔法経路は火打ち石、マナはガソリン。そんなたとえ話で父さんが説明してくれたのを思い出す。
マナが少ないこの世界で、まだ僕と同じ１６歳の優真が、どれほどのマナを体内に蓄えているか――。

ここで、みんなも知っている国民的ＲＰＧで例えて説明しよう。
深い深いダンジョンの奥で、三人パーティの君は敵の不意の襲撃を受けたとする。損害を出しながらもどうにか逃げ出すことに成功したが、一人（戦士）はもうどく状態で秒刻みでＨＰが下がりつつあり、もう一人（賢者）はＨＰが１で気絶している。
残った一人は僧侶ではなく、手元にはもはや、やくそうがひとつだけ。
さあ、この場合、どうするのが最適なのか。

――冷静に考えれば、誰にだって分かる話なのだ。

「おばさまっ！」

さすがは優真。理解した途端に立ち上がり、母さんの側へ駆け寄る。
そこで、ようやく、二人は出会った。

「――あんた誰」
「貴方こそ、誰よ！」
「あーもう、ディーナも優真も、そういうのは後回しにして！」

突然散った火花をかき消すように僕は二人の間に割り込んだ。
なんだろう、何故かはわからないけれど、予感がする。

この二人、きっと、相性超悪い。

「ふんっ、後から説明して貰いますからね、アシュー！」
「ちょっと貴女、レーナに何を」
「どきなさい、邪魔よ！」

どん、と突き飛ばすように優真はディーナをどかして母さんの枕元に座り、その手を苦悶にゆがむ母さんの額の上にかざした。

「シュン」
「分かってるって、姉ちゃん」

目線を交わす双子は、ただそれだけで意思疎通が出来たらしい。
呼ばれたシュンが優真の背後にやってくるのと同時に、優真の手が白く輝いた。
そのまぶしさに僕は思わず腕で目を隠し、目を閉じてしまう。闇夜で突然トラックのヘッドライトに照らされたみたいな輝きに、闇に慣れかけていた視界が一気に暗くなる。

母さんたちは魔法を使うとき、呪文を唱えたり魔法の名前を叫んだりしない。
アニメと違うねと、小さい頃に母さんに話すと、母さんはとてもおかしそうに笑って説明してくれた。
アニメは作り話だからそうしないと盛り上がらないけれど、本当の戦いの時にそんなことをしていたら相手にこちらの手の内が分かってしまうでしょう？　業を放つときにその名を叫ぶのは、ニホンの国の剣道くらいなものよ、と。

光が部屋を満たし、消え去る一瞬の間に、僕はそんな母さんとの想いでを思いだしていた。

母さん。

母さん！

「――母さんっ！」

「レーナ！」

光に押されたようにのけぞっていた俺と、優真に突き飛ばされて畳に手をついていたディーナが、母さんの元に駆け寄る。

その横で、とさっ、と軽い物音がした。真っ青な顔色になった優真を、シュンがしっかりと抱き留める音だった。

「ゆ、優真――」

「バカ……、あ、あたしは大丈夫……だから、おば、さまを――」

「ッ……すまん優真。シュン、頼む」

「あいよー」

双子なのに全然似てない弟は、姉の小柄な体を支えて後ろに下がり、僕たちに場所を譲ってくれた。

「レーナ、ああ、レーナ、目を覚まして……」

「母さん、母さん！　早く起きて！」

僕とディーナは母さんに必死に呼びかける。

優真の術はかなりの効果があったらしい、さっきまで焼き爛れていた肌が、今も真っ赤になってはいるが火傷そのものは消えている。ずぶ濡れだったのは怪我じゃないとしてそのままだったが、体のあ

ちこちにあった傷も消えている。
苦しげだった呼吸も安らかになり、安定した状態になったのがうかがえた。
本当だったら、このまま眠らせてあげたい。傷は癒えたとはいえひどく消耗しているのは変わりないからだ。
でも――今はそうはいかない事情がある！

「母さん、早く目を覚まして！　父さんが危ない！」

一つしかない薬草を、誰に使うか。
答えは、気絶した賢者だ。ＨＰが回復して気絶状態から目を覚ました賢者は、毒を消すことも癒しの術を使うこともできる。
この場合、賢者のＭＰも底をつきかけているのでどちらか片方しかできないけれど、すくなくともこうすれば二人とも命を繋ぐことが出来る。
命さえ助かれば、何とかなる。なぜならここはダンジョンの中ではなく安全な自宅で、ゲームとは違い時間が経てば体力は回復するからだ。
しかし、その場合であっても、肝心なのはスピードだ。
なぜなら賢者が目覚めて術をかけるまで、戦士のＨＰはどんどん低下して行きつつあり、ゼロになるまでおそらくもう、猶予はないからだ。

「レーナ！」
「母さん！」
「おば……さま……」
「おばさん！」

全員の叫びが重なった、その時！

「――あなたっ！」

母さんが雷にでも撃たれたかのように飛び起きた。
びっくりして言葉も出ない僕たち四人を見渡す母さんに、僕たちは一斉に父さんのうずくまる壁の方を指でさして示す。

「あなた！　あなた！」
「……レーナ。すまん、頼む……」

父さんはもう、笑う力も失っているのだろう。
聞いたことさえないほど弱々しい声で、父さんは母さんを呼んだ。
そんな父さんの側に、さっきまで死にかけていたとは思えないほど機敏な動きで駆け寄った母さんは、父さんのその手を握って声をかけた。

「ええ、まかせなさい、リキ。貴方は私が、絶対に助けます」

母さんが、父さんを名前で呼んだ。
それはつまり、そういうことだ。息子である僕は分かった。
こういうときの母さんは、奇跡だって起こす。なぜなら母さんは、父さんを愛して愛して愛し抜いているからだ。
みんな信じるかい？　愛って本当に奇跡を起こすんだぞ？
僕は見たことがある。

「ディーナ！　いるわね！」
「は、はい！」
「悪いけど、貴方のマナも貰うわよ。いまのわたしのマナだけでは救いきれない」

するとディーナは、母さんの目を見つめて力強く肯いた。
「はいレーナ。それでリキが助かるのなら、マナだけでなく、この魂までも」
「バカね、それじゃあわたしたちが命がけであなたをここまで連れてきた意味がないじゃない」
母さんは小さく笑って、ディーナの頭に手を乗せた。
ディーナは、まるで敬虔な信徒が神に祈るように跪いて目を閉じた。
「アシュー、シュン」
「何？　母さん」
母さんは、何も出来ずに事態を見守っている僕たちのほうを振り向きもせずに声をかけてきた。
「――後は、頼んだわよ？」
はい、と答える間もなく、さっきとは比較にならないほどの白銀の輝きが、父さんの体の上に生まれ――
爆発したかのような光が去ったあとに見えたのは
「母さん！」
「おおっと！」
糸の切れた人形のように崩れ落ちる、母さんとディーナの姿だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9160s/

二代目勇者は異世界育ち！

2011年10月8日04時33分発行